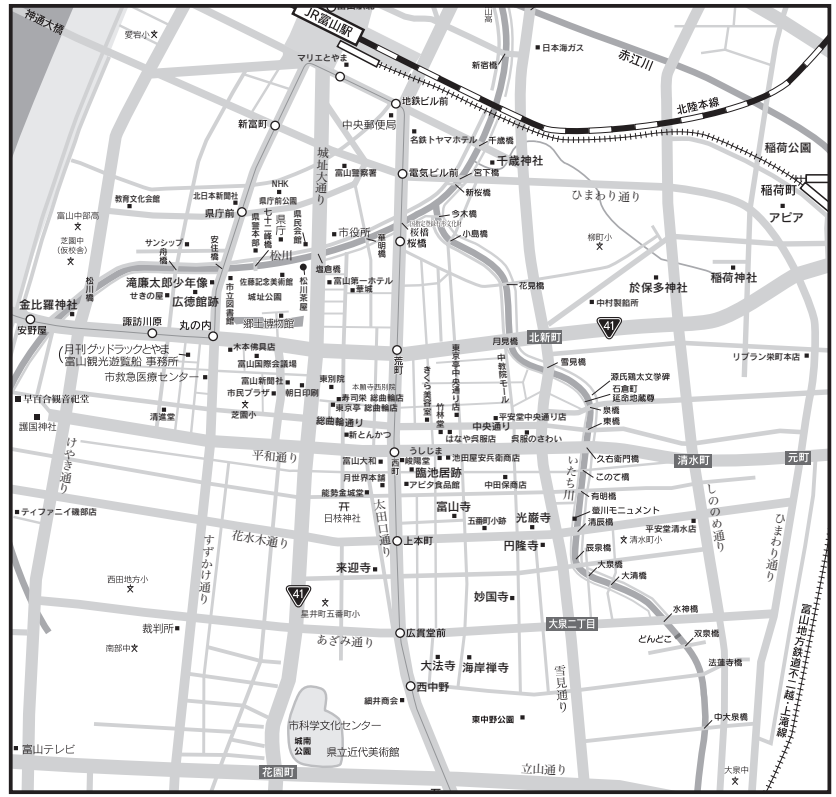
historic places of toyama

富山の史跡

昭和20年8月の大空襲のため、富山市には昔からの古い建物はあまり残っていませんが、お墓や碑、あるいはお寺や神社が現代に歴史を伝えています。富山のことがもっと好きになる史跡をご紹介します！

資料：『富山市の「文化財・史跡案内」』（S63 富山市教育委員会発行）、他



「富山市」の名はこのお寺に起因

富山寺（ふせんじ）

富山市古鍛冶町

富山寺は真言宗の古刹で、富山市内でも最古の寺院とされる。奈良時代の神亀元年（724）、僧・行基が、大和の国から越中の国・藤井村に来脚の折、現在の富山城址のあたりに一寺を建立、藤居山富山寺と称したのがそのはじまりといわれる。その後、前田家の富山城築城のため現在の地に移され、普泉寺と改めたという。明治43年に、寺の名を元の字に改め、再び富山寺と称している。

古来より、富山市の市名は、この寺の寺号に起因するといわれてきた。市内、山王町の日枝神社は、この藤居山富山寺の鎮守であった山王権現を祀った神社といわれる。

〈富山寺〉市内電車上本町駅から徒歩数分

山王さんの名で親しまれる市内一番の大社

日枝神社

富山市山王町

日枝神社を「山王さん」というのは、比叡山麓にある日吉（ひえ）神社の祭神を山王権現と称し、釈迦如来の仮の姿として天台宗の護法神とするという考え方からきている。日枝神社はその昔、新川郡針原の郷にあったが、建武2年（1335）の戦いで焼かれ、旧大山町隠土にのがれ、その後転々とした。天正10年（1582）頃に佐々成政が現在地へ移し、富山城の守り神として祀ったとされる。成政退去後は前田利長が社地を寄進し、本殿等を造営して以来、前田氏代々の宗敬を受けた。境内には、成政が大切にしていたとされる弁慶石という庭石が残っている。6月1日、2日の祭礼は山王まつりとして知られ、市民の楽しみな祭りとして受け継がれている。

〈日枝神社〉市内電車西町駅から徒歩数分

庶民の間に広まった天神信仰

於保多神社

富山市於保多町

於保多神社の社号「於保多」は、この社が初めて建てられた地名の太保田にちなんだもので、明治になって万葉仮名に改めたものである。この神社の由来は、もと宮司で、後に延暦寺の僧となった恵顕上人が、同寺の座主から石榴天神像を祀り伝えるため、永仁2年（1294）、浄禅寺（梅沢町3丁目の時宗寺院）を創建した頃にまでさかのぼるとされる。

その後、慶長10年（1605）、前田利長が富山城に隠居地を移した頃、この社も富山城下に移ったとされる。さらに富山初代藩主前田利次が富山に入城後は、自らの氏神として深く尊宗し祈願所とした。宝永5年（1708）、水害のため現在地に移った。社伝では、ある日、前田利次の前に菅原道真公の像が現れたので、城下中の天神像を調べたところ浄禅寺に伝わっていた像の姿と一致したと伝えられる。前田家は元来、菅原道真を家系の祖としており、天神信仰は藩の保護のもとに庶民の間にまで広く普及した。正月に天神様の掛軸を家ごとにかざり、男の子が生まれると天神像を贈るという習慣は、今も一般に行われている。

〈於保多神社〉

神社の境内には、2代藩主正甫の鋳造した時鐘の破片を利用した「正甫公の碑」や、臨池居と称する大きな寺子屋を築き地方文化に貢献した「小西有実・有義の記念碑」等、多くの碑が建立されている。

〈正甫公の碑〉時鐘の破片。
於保多神社の境内にある。

売薬発展に貢献した寺子屋の跡

臨池居の跡

富山市上本町地内

臨池居とは、江戸時代中頃から明治時代にかけての富山県内における代表的な寺子屋の一つとされた私塾の名前である。臨池とは、中国後漢の学者、張芝が池のそばで書を学んだという故事にちなんだものといわれる。この私塾は越中国の中でも最も古く、小西塾とか小西屋とも呼ばれた。明和3年（1766）、小西鳴鶴が西三番町に創設以来、その子有斐、孫有実など5代にわたって経営が受けつがれ、明治32年の廃塾まで約130年間続いた。この塾は、天保年間（1830～1843）頃から当初の漢学塾から寺小屋へと性格を変えた。その授業内容は、往来物・習字・そろばんのほか、当時の売薬業の発展にともない、薬名張や調合薬附という授業を加えるなどの独自性をもっていた。また、小西屋流と呼ばれるこの塾独特の書風も生んだ。明治3年当時の記録によれば、塾生は男子600人、女子200人程であった。

〈臨池居の跡〉
市内電車に西町下車、徒歩1分

万代常閑の墓と八重崎屋源六の碑

妙国寺

富山市梅沢町

日蓮宗の寺院・日向山妙国寺には、富山に反魂丹の製法を伝えた万代常閑の墓と売薬行商人の祖・八重崎屋源六の碑があり、富山売薬と縁の深い寺として知られている。万代常閑は、備前岡山藩の医師で、天和年間（1681～1683）、富山に来遊し、妙薬・反魂丹を富山2代藩主前田正甫に献上したとされる。また、その薬の製法を城下の薬種商・松井屋源右衛門に授けたともいわれる。さらにこの寺の檀徒で、越中売薬の行商の祖とされる八重崎屋源六は、岡山に万代常閑を訪ね親しくなり、常閑臨終の際も手厚く介抱し、常閑の守護仏・薬王菩薩と常閑の分骨を富山へ持ち帰り、妙国寺に安置したといわれる。

〈妙国寺〉
市内電車広貫堂前下車、徒歩数分

サクラパックス(株)

正甫の菩提寺

大法寺

富山市梅沢町

大法寺の創建は、慶長11年（1606）で、照盛院日行上人が開基とされる。貞享3年（1686）、富山2代藩主前田正甫は、大法寺の中興の祖といわれる日徳上人の教化を受け、日蓮宗に深く帰依し同寺を自らの菩提寺とした。

正甫は大法寺に寺領として9000坪を寄進し、元禄4年（1691）には富山領内各宗寺院の首席と定め、この寺を保護した。この寺には、正甫が寄進した赤梅壇の釈迦牟尼仏や厄除けの梵鐘等、数多くの寺宝が蔵されている。

境内には、万代常閑翁から反魂丹の製法を伝授された富山城下の薬種商・松井屋源右衛門の墓や、富山藩歴代の家老職の墓等が残っている。

〈大法寺〉
市内電車広貫堂前下車、徒歩数分

前田利次の菩提寺

光巌寺

富山市五番町

光巌寺は、市内五番町の曹洞宗の寺院で、能登門前町総持寺の末寺である。越前国の僧が長禄2年（1458）に越中国砺波郡増山村に創建したのがはじめとされる。かつては寺領1100石を有し、末寺18ヶ寺を束ねる巨刹であったが、戦国の動乱期に越後の上杉謙信に攻められ焼失した。後、慶長10年（1605）、加賀藩主前田利長が利常に藩主職を譲り富山城に移った頃に光巌寺を増山から富山城下に移したといわれる。富山初代藩主前田利次は、光巌寺を自らの菩提寺と定め、現在の地に所在させた。富山の城下町がつくられた時、大手門を出て左に折れたところから一番町～五番町と名づけたのは、光巌寺に至る道筋にあたるからであるともいわれている。2代藩主正甫は日蓮宗に改宗し、5代利幸まで帰依したが、光巌寺が藩祖利次の菩提寺であったことから、6代利与が再び曹洞宗になった。以後、一代ごとに日蓮宗、曹洞宗と改宗を重ねたとされる。境内には富山藩の著名な国学者、南部家3代（南部草寿、南部南山、南部景春）の墓が残っている。また、寺院内には、岸駒筆の絵伝や円空仏等、多くの寺宝が蔵されている。

〈光巌寺〉
市内電車上本町下車、徒歩数分

富山藩校

広徳館跡

富山市丸の内（富山税務署付近）

安永2年（1773）、富山6代藩主前田利与は、下級武士の子弟を教育する機関として、富山城下の総曲輪に藩の学校を創立し、広徳館と名づけた。この学校の学則は、江戸の昌平校の規則にならい、士風・道義の高揚を目的とした。儒学者三浦平三郎を江戸より招き学頭とする一方、家臣吉村順左衛門を江戸へ派遣し、昌平校の学風を学ばせた。講義場には孔子の画像をかかげ、主として孝経・論語を講じた。加越能三州における学校のさきがけとされる。

〈広徳館跡〉
市内電車丸の内下車、徒歩1分

さんさい踊りがくりひろげられる

円隆寺

富山市梅沢町

毎年7月14日、15日の両日、円隆寺の祇園会の宵に、同寺の境内を中心に、「さんさい踊り」がくりひろげられる。近隣の子供達（特に女子）が、ゆかた姿に赤い前掛けをつけて、「サーイサンサイ、ヨンサノヨヨナーイ」とはやしながら、輪になって踊る素朴で微笑ましい行事。この踊りの起源は、前田利次が初代の藩主として、富山城入りをした寛永16年頃（1639）であろうと伝えられる。はやしことばの中に、「もう佐々の世でない」という意味が込められているといわれ、前領主の気風を排すため、領民の間に唄いはやらせたという説もある。富山藩ができて間もない頃、城下で

の盆踊りの夜に金沢藩士と富山藩士がいざこざを起こしたのがもとで、市街地での盆踊りを厳しく取り締まったが、この踊りだけは女・子供だけのものであることから取締りから外され、今日まで長く続いたといわれる。

前田家代々の墓所

長岡御廟（ごびょう）

富山市長岡新

長岡御廟は、富山藩初代藩主前田利次が、延宝2年（1674）の分封の際に、百塚の地に城を築くことを強く申し出ていたが、時の徳川幕府からは認められないまま死去したので、2代藩主正甫は父の気持ちを継ぐ意味で、百塚山隣接地の長岡にその御霊を葬ったのがはじまりとされる。御廟内には、前田家11代の藩主の墓が並び、参道の両側には、藩主の重臣達が奉納した約600基の石灯籠が立つ。毎年8月8日の藩祖利次の命日には、真国寺の住職らが読経しながら灯籠に灯を点じる御廟祭が営まれる。御廟の入口にある曹洞宗真国寺は、江戸時代からこの墓所を守ってきた寺。明治維新の神仏分離政策により、仏式から神式に改められたので、廟内には大きな鳥居が建つ。

〈長岡御廟〉

成政が秀吉に服従の意を示した

佐々成政剃髪址

富山市安養坊

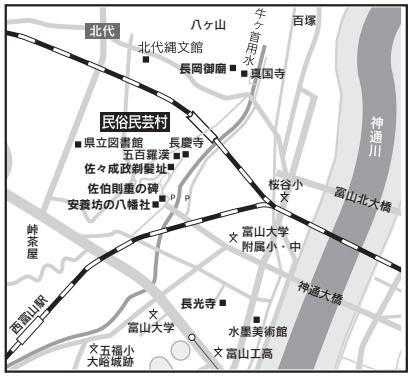
戦国武将・佐々成政（1536～1588）は、織田信長の命を受けて越中の領主となったが、信長の死後は天下統一のあとを継いだ秀吉に従わず、しだいに孤立していった。天正13年（1585）、秀吉は10万の大軍を率いて越中に攻め込んだ時、勝ち目のないことを悟った成政は降伏を決意。白鳥城の秀吉の本陣に向かう前に、この安養坊地内の草むらにて髪を剃り、僧侶の姿で秀吉の軍使と会見したとされる。

早百合姫の墓が残る

長光寺

富山市五福

長光寺はもと真言宗の寺院で呉服山安寧坊と称した。旧北陸街道の難所とされた安寧坊（現在の安養坊）にあり、その昔は松林の間に壮麗なる伽藍を配す大寺院であったという。江戸時代には、富山城下の西の鎮護とされ、歴代藩主の宗敬も厚かったようである。現在の地に移ってから教如上人の教えを受け浄土真宗に改宗。2代藩主正甫は、この寺に安置する不動明王像を特に尊信し、この寺に三首の和歌を与えるとともに、丁字梅鉢の紋（富山藩の家紋）の使用を許可したという。貞享3年（1686）、安養坊坂で富山藩の時鐘を鋳造した折、正甫は本寺を休息所と定め自らがその指揮にあたったとも伝える。境内には佐々成政の愛妾・早百合姫の墓が残されている。



〈長光寺〉

郷土の名刀工

佐伯則重の碑

富山市安養坊

鎌倉時代末頃の名刀工・佐伯則重（1289～1366）は、正応2年、越中国婦負郡御服庄（現在の五福）に生まれた。文保2年（1318）、当時越中の名刀工として知られた郷義弘の門に入り8年間修行後、鎌倉の岡崎五郎正宗に入門。正宗の相州流の秘伝を授けられ、正宗十哲の一人にも数えられた。40歳で帰郷、呉羽丘陵の一角で多くの名刀を鍛造した。

〈佐伯則重の碑〉